

# 今日の五歳児にとっての文化生活の経験\*



\* 訳注 「文化生活の経験」というのは *experience* の意識である。文字どおりに訳せば「分けあうこと、役割をもつこと、関与すること」などであるが、本文の内容からいって、文化生活の経験の仕方についてふれてあるので、このように意識した。

## メアリー・ジェーン・ルーミス

オハイオ州コロンバスにある、オハイオ州立大学の教育学教授で、付属校の初等教育研究・研究部部长、メアリー・ジェーン・ルーミスは、文化生活の経験は、家庭生活での経験の相互作用が、学校生活にも存続されるように、その基礎概念をひろげて考えることを提唱している。

子どもたちが幼稚園や学校にはいる前に、どんな文化生活の経験を学んできているか、という我々の価値判断は、今や変えられなければならないだろう。生活水準が向上し、いつのまにかうまくみんなが平等化されるような、マスコミなどの仲介手段があるおかげで、幼児たちにとっても、文化生活の経験は、かなり変わったものとなってきた。時とともに、文化生活の経験についての価値や目標は、検討されなおす必要があるし、五歳児にとって適当な文化生活の経験として、どんなものを与えたらよいか、よりよい方向を考えなおす必要がある。なぜ文化生活の経験が必要

か、というすっかりした基礎概念をもつことによって、なにを、どのように、いつ、経験させたらよいかという、新鮮な考え方もつことができるようになるのである。

### 経験が能力や資質を育てる

五歳児が幼稚園にはいる前に、どんな文化生活の経験をしてきているか、ということを知ると、幼稚園生活での文化生活の経験のあり方について、我々がどんな基礎的な概念をもつたらよいか、ということがわかる。多くの幼稚園では、子どもたちが「家から

話題になるものを持ってきて、それを見せながらお話をする」時間がもうけられているが、それよりもはるかに多くの経験を、大抵の家庭で、子どもたちは家族のメンバーとして、もっといろいろな経験している。家でどんな文化生活の経験をしてきているかについて、もっとよくその概念をきくってみよう。

もしおとなが、子どもたちに何でも自由に経験できるように可能性をひろげてやると、子どもたちは、ある経験をとおして理解した概念を、別の概念に適応させて覚えていくようである。たとえば、「シェバード」というのは宇宙飛行士だよ」とか、「アトラス」というのは宇宙ロケットのことだ」などと、十分わからないながらもそんな話をしておとなをよろこばせたりする。こうして子どもたちは、現在当面する事柄の中から、自分の知っている「宇宙飛行士」とか「宇宙ロケット」という言葉を使っているが、おとなが理解しているような意味で「シェバード」とか「アトラス」ということは、わかっていないのである。\* この例にみられるように、学習というものは、こうした関連でだんだんになされていくことがわかる。子どもたちが身近に当面している部分的な

\* 訳注「シェバード」というのは、固有名詞としては人の姓であるが、名詞としては、羊飼とか牧師という意味もある。「アトラス」というのは、宇宙ロケットの一種として名づけられたものであるが、名詞としては、地図や図表のことをいう。ここでは、子どもがこれらの言葉を宇宙と関連して使用しているが、他の多義的な意味を認識していない例としてあげたものと思われる。

経験に関連づけながら、もっと広い基盤にたった考え方ができるように、おとなは子どもの経験を整理してやるとよいのである。

テレビは五歳児に、もっと直接、文化生活の経験の機会を提供し、経験内容をふかめる働きをしている。何をどんなふうに見たいかをおとなからあまり指導されないでも、テレビは子どもたちにとって、よろこんで受けとめるコミュニケーションの手段となっている。我々おとなは、五歳児のテレビの見方について、あれこれやかましくいわずに、むしろ気楽に考えるように心がければよいのである。幼稚園で部屋にテレビのおいてあるところでも、先生がある番組をえらんで子どもたちに見せようとしないうり、子どもたちは、自分たちがいつもやっている遊びの方をえらんで、テレビのあることを無視している、という事実もみられるのである。問題は、テレビが「よい」とか「わるい」とかいうことよりも、そのプログラムの内容が、どんなふうに着想や概念にせまっているかという水準の方にあるといえる。

旅行は、今日では、五歳児にとってはもう珍しいことではなく、むしろよろこんでする経験だといえる。人々はだれもかれもが、職業や階級のいかんにかかわらず、いろんな理由で、家族ぐるみでひろく旅行をするようになっていく。「なぜ旅行をするのか」ということは、今や「どんなふうに旅行をするか」という課題に変わってきているのであり、その経験の中で、子どもたちは

「世の中はどんなふうか、ことがはこんでいるのか」ということを学んでいくのである。ところで「なぜ旅行をするのか」という理由を探ってみることによって、全く新しい角度からその着想を言葉で表現したり、遊びの中にとりいれたりすれば、新しい文脈にたった文化生活の経験を身につけることができるのである。そうすれば、「旅行をするかどうか」ということを、もっとよく理解する助けになるのである。たしかに、なぜ旅行をするのかという面を考えると、一般に強調するように、旅行中「何をしたり」「何を見たり」して行くかという点は、注目に値する。その方向にもう一度強調点を向けなおしてみると、旅行の経験中で、「やってみること」や「見てくること」などの目的ややり方などが、自分自身にとって個人的にどんな意味があるかに、焦点をむけなおすきっかけができる。また、文化生活の経験をとおして、自分なりにいろいろな意義を探究していくことにより、世の中で時としてみられる、はかないようなつまらないことでも、破壊的、無秩序なものとしてでなく、建設的なものとして効果をあげていくようにする洞察を得ることもできるかもしれないのである。

今までに、自分の住んでいた小さな山村以外に出たことのない子どもにとっては、「いなか」でのよかった生活について話したり、そういう生活の仕方を続けていくことを支持されなければ、

せわしい下町の新生活は、おそろしく混乱をきたすものとなる。新しい環境の中で経験を価値ある文化生活の経験は、場面への適応や新しい同一化を育てるのに役に立つようである。

もし我々教師が、子どもたちが何を経験してこなかったかということをはじめに強調するかわりに、たとえ今はまだ十分子どもたちの身につけていないとしても、子どもたちが少しでも持っている「文化的に意味のある」資源や能力の方を見出してやることであれば、自分自身や人を理解していくためには、どんな経験を広げていくことが大切であるか、また、それを我々は、自分自身にとっても子どもたちにとっても、どんなふうに妨げているだろうか、ということもわかってくるのである。こうして肯定的な面を強調するということは、子どもたちの親にとってもためにもなるのである。つまり、親と先生との関係にもっとむくわれた変化をもたらし、今までどんな点が欠けていたかということよりも、もっと子どもの益する面に焦点をあてて、前進する方向にむかい、しっかりとした基盤にたって出発できるようにする。

旅行というものを、文化生活の経験資源の積み重ねであるという面から考え、更に、次の学習経験のために、あらかじめよく計画をたてることによって、個人にとつての意義をひろげていくものである、という考えにたつていけば、どこに行こうと、旅行の意義はひろがるのである。

五歳児は疑いもなく、もっとたくさんの文化生活の経験をしている。ただここに述べた例は、今日の子どもたちがどんなことを知っているかという時に、我々の文化の中で成長していく場合、どんな点を大事な点として強調していくべきであるか、ということ十分に示す例としてあげたものである。

### 「文化生活の経験」の意義

五歳児にとって、文化生活の経験の価値や目的は何であるか、ということを検討しなおしたり、何が「文化生活として意味がある」ものであるかを探ったりする前に、幼稚園児にとっての文化生活の経験が、どういう考えにもとづいてなされているのか、その由来をたどってみることは意味がある。ムーア(Moore)は、文化生活の経験を、「アメリカの幼児のための文化の型」であって、他の国ではあまり強調されない型だ、と説明している。<sup>\*1</sup> 自分の所有物を分けあうようにということを、幼児の頃に早くからおそわるといふ考えは、アメリカの現代の専門書や一般図書の中に、かなりよく強調されて出ている。このことは、子どもたちがお互いにおもちゃや道具を使いあったりすることにより、どこかに所属しているという安定感を得ることと関連して考えられる。二〇人も三〇人もいる幼稚園で友だちと道具を分けあうことは、ある子どもたち、特に自分の家で少ししか物をもっていない

い子どもにとっては、当惑する問題となる。その点に関して、ムーアは、「五歳児だったらどの位お互いに分けあえればよいだろうか?」<sup>\*2</sup>と疑問をなげている。

道具や材料を分けあうことを学習する時、多くの問題をひきおこすから、順に番をきめていくという考え方をとりいれると、統制のとれた場面をもたらすようである。しかしながら、我々の文化で価値をおく分けあう気持というのは、自分が特別にもらったものまで分けあう、ということではないということ、先ず知ることが大事なのである。幼児が親やきょうだいと安定した関係にある時というのは、誰かに何かをしてあげたり、お互いに存在が必要だと思われたり、好かれたり、価値あると思われたりしている、と感じている時なのである。子どもたちは、得ようとするばかりでなく、与えたり目的を達しようとしてるのであり、多くの子どもたちは、かなり小さい時から、この経験を分けあうことと単に物を分けあうことの差を学ぶのである。

もし我々が、自分が子どもだった時に、どんなふうな経験を分けあう機会をもってきたかを思い出してみたり、ずっと今日までの生活において、どんなふうにものを分けあう微妙ないろいろな経験を広げてきたかを考えてみると、子どもの頃には、分けあうという考え方を、いくらか狭義に解釈して、無駄な時を過ごしていたと思われるのである。「五歳児だったらどの位お互いに分け

あえればよいだろうか？」という問に加えて、「経験を分けあうには、もっといろいろな方法があるということ、我々は子どもたちに教えてやれないものだろうか？」という問も出したのである。もしこれらの問に対する研究があれば、現代の文化の型において、経験を分けあうという本當の価値は何であるかということに、もっと接近していく助けになるだろうと思われる。

### 新しい見方にたった文化生活の経験の価値と目的

文化生活の経験の価値と目的を考えなおしたものととして、ミラール (Miller) の書いた、幼稚園児の文化生活経験の面における知的発達についての記事は、非常に意義深く役に立つ。

生活を共にしている時には、分けあう物についての質問をしたり、子どもがそれについて話すように励ましたり、すでに分けてもらった物と関連づけたりすることをとおして、知的な成長を促進する機会がたくさんある。その物について話したり、関連性、再生、一般化、前後の関係、などを強調して学ぶことができる。<sup>\*3</sup>

我々が今日実際生活で認識している価値や目的よりもはるかに多くの示唆を、この言葉は包含している。文化生活の経験は、ある特定の曜日のある特別な時刻に限るわけでもなければ、ある種の材料に限るということでもない。しかし、効果的な学習をもたら

すためには、いくつかの面があるということが力説されている。

即ち、概念形成の発達には、家庭でなされるという事実を、十分認識せざるを得ないと強調している。再生、一般化、前後の関連性などの学習の水準を、概念形成の発達を促進する方向にむけていくためには、ほかのどの学習経験にも必要なように、子どもたちがどこにいようと、各自にあったやり方で、文化生活の経験をしていく能力が育つような機会を提供してやる必要があるのである。

最近の学習の理論の述べるところによれば、個人の成長の自己実現の面に焦点をおくことにより、かくれた知的発達の資力を見出すことができるといわれている。我々も少し場面の状況を変えてみて、将来の文化生活の経験の目的や期待を新しく見なおしてみれば、もっとよりよい価値を見出すことができるかもしれない。その場面や状況の例を次にあげよう。

- ・ 正確な標準語でなくてもいいから、どんな話し方でも気楽に受けとめて、自由に話し合えるようにする。
- ・ 家庭で親子の間でどんな文化生活の経験をしているか調べる。
- ・ 幼稚園での文化生活についての子どもを考え方を、家での文化生活の経験の延長の場として考えているものだとみなし、歓迎してやる。

・ 家庭から幼稚園という環境に移った時に、子どもたちが安定感をもつために持ってきて離さない所有物について、みんなどうま

く遊べるような方法を考案する。

・ どのような物が文化生活の経験を分つたために供されたかというこ  
とよりも、それによって個人的にどのような内容の経験をしたか、  
という考え方に主な強調点をおく。

・ 先生といっしょに「やってみたこと」(文化生活の経験で)につ  
いて、ほかの人たちに話してみるように励ます。それによって、  
その子どもは同一化の気持をひろげ、ほかの子どもたちに興味あ  
る内容をもたらず。

・ 知識を与えるだけでなく、記録したり、気持を話しあったりし  
て、子どもたちがいっしょに手紙を書いたり物語を作ったり、詩  
や歌が作れるようにさせる。

・ ほかの子どもたちにまで創造的表現に興味をもたせることがで  
きるように、子どもたちが自分たちでつくった、歌や物語や詩を  
作るグループを励ましてやる。

・ 五歳児に、テレビの見方(概念化)や利用法を指導する。

・ 先生がやらせた経験をしている小グループが、ほかの子どもた  
ちに新しい興味を育てる貢献ができるように励ます。

・ 日常生活の経験の中から、子どもたちのとらえた着想や考え方  
についての、評価的な意見を、励ましてやる。

・ 五歳児にとって、同じ年齢内で自他の概念が反映されるような  
場面を、幼稚園で作ってやる。

・ 学校の内外で経験した毎日の経験内容の積み重ねの中から、適  
当な焦点をとり出せるような新鮮な方法をくふうする。

・ 家や幼稚園ばかりでなくもっと広い社会との関係において、文  
化生活の経験の概念を広げることができるような機会を与える。

少なくとも、ここに述べたいいくつかの場面やそれに関連した価  
値観は、文化生活の経験についての考え方に、今まではちがっ  
た考えをもたらずだろう。「文化生活の経験をしている時に、子  
どもたちにとっては、どんな経験が生じているのだろうか」とい  
う点に、我々の中心的な価値と関心を十分にむけていけば、型に  
はまった、従順な、とおり一ぺんあり方はやめようとするよう  
になり、もっと個人を高めていき、価値あるものとするために、  
改めていくようになるものである。そのような「文化生活の経  
験」なら、今日でもよくみられるようなバラバラな経験としてで  
はなく、もっと幼稚園生活全般にわたって、有意義な交流をもた  
らすような経験にすることができる。

### 五歳児にはどんな文化生活の経験が可能か

もっと力動的な価値観にもつきながら、広い意味での文化生  
活の経験という点から期待をもって見た時、五歳児は五歳児なり  
に、文化生活の経験の仕方を考案する貢献ができるように思われ  
る。子どもたちが学習経験をしているうちに、それぞれ小さいブ

グループでの、あるいは全体のグループでの文化生活の経験において、その内容を発展させる機会をもち、その価値を理解するようになれば、我々は今までやってきたように、週に一〜二回特定の時をつかって、「経験したことをみんないわせよう」とするような日課にとらわれないですむのである。

多くの五歳児は、「文化生活」の資源を幅広くそろえてやれば、おとなの助けをかりながら、それを認めたり利用したりする点で、かなりよくものごとを識別する能力ができています。たとえば、五歳児の多くは、次のようなことを認識するのに、もう幼すぎるようなことはない。

・家でしてきたいろいろな文化生活の経験のやり方を、学校の間でも適応しうる。

・家族が文化的社会的に認められている能力をもっていたり、所蔵品をもっていると、今日社会的に生きた価値をもつものについての興味を育てる面で、貢献することができる。

・家族や友だちは、時宜をえた興味を育ててくれたり、特別なところにつれていってくれたり、学校で必要とするような情報を提供してくれたりして、価値ある人的資源としての役割を果たす。

・学校にいる動物やペットを世話する責任を分担するために、動物たちに必要なえさを、個人個人で提供することができる。

・ふだん家で使っているような道具を、学校で問題解決や実験に

利用することができる。

・家族や友だちから習ったゲームや、自分たちが新しく考えたゲームを、興味をもってほかに人に教えることができる。

・今やりかけている課題に対して、うまく目的を果たすように利用するために、おもちゃや模型を家からもつてくることができる。

・今までに自分が経験したことについて、ひろくその内容を知らせるために、家にあつて役に立つような本や雑誌や写真などを、選びだして利用することができる。

・音楽的な興味のためばかりでなく、いろいろな目的に、レコーダを選んで適切に利用できる。

・自分たちで詩や物語や歌を作って、先生や親たちに記録してもらえば、ほかの子どもたちにも楽しんでもらえる。

・「お話の時間」に限らずほかの時間にも、新しい物語やお気に入りの物語を、時に応じて適切に読める。

・旅行や映画などのように皆のするような一般的な経験は、感情や経験の幅を広げることができ、新しい興味の方向を得る助けになる。

・考えや計画を、目的をもって追求したり探求したりすると、もっといい考え方を産むことができ、それによって、目的をよりはつきりさせることができる。

・子どもたち全員に注目させながら、毎日くりかえし行なって学

ばせようとするよりも、先生が提案したものを個々の子どもが手伝いながら、時々あるいは毎週順々に経験を積んでいくやり方が、はるかに興味をもたせることができる。

・文化生活の経験を分けあう能力は、お互いに手を貸しあったり、考え方を分けあったり、細かい配慮をもって励ましの言葉をかけあったりする学習をおして、その経験の表現の仕方や考え方の確認をすることができる。

これらの例は、五歳児が今までのでもっていた文化生活の経験に、新しい経験をどう調和させながらその幅を資源的に、内容的に、いくらかでもひろげることができるかどうかということ、我々が考えなおす助けになるし、我々の価値観のわくを改めて、もっと深い洞察をもつように充足して考えていく助けになる。

あらたに見なおし、新しく理解しなおしたやり方によって、我々は子どもたちに、できるだけいろいろな種類のことを、幅広く計画し、実行にうつすようにしてやることができる。子どもたちの目的とされていることを、我々おとなはよくきいてやらない限り十分理解できないものであるが、子どもたちの目的に我々の目的がよく調和できるようになれば、はかりしれないほど文化生活の経験のやり方に、柔軟性をもたせることができる。そうすればまた、きまりきった型にはめこんで、ある経験から次の経験へと、ただむやみに経験を変えて与えるというような、つまらない誘惑

をきけることもできる。このように、文化生活の経験を、どうやっていつ与えるかということは、五歳児が今までに何を個人的に経験してきたかということと、決してきりはなしては考えられないものである。更に、幼稚園時代に適切な時をみはからって、どんな条件でどんな内容のものを与えれば、もっと建設的な水準で学習させたり、相互の関係を学習させることができるか、ということも忘れてならない問題である。

### 指導上の問題点

要約すると、文化生活の経験は、その背後にある考え方ということが、最も大事で価値あることなのだ、ということ、ここで再び強調したい。文化生活の経験は、個人のもっている潜在的な可能性を、創造的、自発的に表現し、発展させる手段となり、それによって究極的には、個人を、集団を、文化を、高揚していくことに貢献するものなのである。文化生活の経験というものは、文化の重要な型を育てるためにも、価値あるものとして存続させ経験させていくべきものである。したがって、**文化生活の経験**が、本当にその真価を提供しているかどうか確かめるために、今ひろく行なわれている経験のあり方を再検討していくことから、出発したいと思う。先生たちがすでに問題意識としてとりあげている諸問題に加えて、我々は次のような点についても、考慮して



いく必要があると思われる。

一、子どもたちの幼稚園や学校での文化生活の経験を、どんなふうにひろげてやれば、家での方向に似たかたちで、望ましい方向に、経験をむけていくことができるだろうか。五歳児の文化生活の経験として積みあげてきた能力や資質については、すでにこの紙面で論じたが、ある限られた一面についてだけ考えてきた。もっとひろい立場からの評価が必要であって、それは、いろいろな場面条件における先生たちによってのみ、ひろく検討することができると思われる。

二、物をみんなで分けあうということは、生活経験の中では限られた経験ではないだろうか。もしそうだとしたら、そういう限界を、我々はよく注意して考えなければならない。はずかしがりとか、何かがうまくできない子どもたちにとっては、そうした限界も、ある点で安定感を与えることになるが、何でもうまくこなす子どもたちにとっては、それだけではあまりに限られてしまいい、もっと別の生活経験から得ることがあると思われる。

三、幼稚園や学校の環境自体が、どんな点で意義深く生きた内容の文化生活の経験を与えることができるだろうか。我々がふれてきたいくつかの考え方は、文化生活の経験としての環境条件の見方を、いくらか変えたかもしれない。学習場面を生きたものにするための我々の目的を考えなおすにあたり、文化生活の経験

が、ただバラバラに関連のない日課のような経験としてでなく、たくさんのがった経験を補いあっていく機能となれるような新しい方法を、発見していくべきである。

四、文化生活の経験の、本来の目的を見出す、もっとよりよい方法を探り出すためには、どんな新しいわく組を考えれば、先生たちにとって役にたつだろうか。その基礎となる、ある面については、すでにここで述べてきた。実際にその新しいわく組をどう発展させるかということは、我々の提案したその基礎を修正し探究し、更にそれを適切な時にうまく将来役に立つようなかたちで実行にうつすように、その新しいわく組をつくりなおしていく、先生たちの掌中にあるのだといえる。この線にそって我々が最善をつくした時に、今日の五歳児にとって、意義深い相互関係をもった新しい水準への方向づけが、可能になるのである。

後記 文中、特殊な用語の訳については、東京大学教育学部助教 東 洋先生のご教示を得た。記して謝意を表する。

(日本女子大学・宮本美沙子訳)

\*原注1 Elenora H. Moore, *Fives at School*(New York: G.P. Putnam's Sons, 1959), p.78.

\*原注2 同掲書 p.83.

\*原注3 Isabel Miller, *Kindergarten Goals and Activities* (Columbus:

Center for School Experimentation, Ohio State University, Summer 1960), p.5.